

《 山 梨 県 》

第 63 回関東甲信越音楽教育研究会 山梨大会

研究主題 「確かな学び 広がる音楽」

～知覚・感受をもとにした音楽的思考力, 判断力, 表現力等の育成～

I 主題設定の理由

1 はじめに

今の学校教育のおかれた状況は、新型コロナウイルス感染症対策のため、これまでの学校の教育状況とは大きく異なり、状況に応じた教育課程上の工夫や対応が求められている。この予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、自ら考え、自らの可能性を發揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要である。

平成29年告示の学習指導要領において音楽科は、「生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力」の育成を目指すとして規定され、資質・能力の育成にあたり、様々な事象を捉える各教科等ならではの思考の枠組みや特性に沿った視点である「見方・考え方」が示された。この「見方・考え方」を働かせた学びを展開することで、既存の知識を他と関連付けて定着させたり、構造化された新たな知識として習得したり、技能を習熟・熟達させたりしながら、生涯において生きる学力、つまり確かな学力の育成が求められている。

音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ受することは、これまでも大切にしてきた学習である。これをもとに、音楽が生活や社会、伝統や文化とどのように関わっているかを考え、その関連の中で音楽を捉えることにより、音楽が存在する意義や価値についての認識が一層深まっていくことが重要である。こうした視点を重視しながら、生涯において音楽を愛好する心情を育むとともに、音楽に親しみ豊かな情操を育て、生きがい教育の実現を目指し、研究を推進していき

い。

2 大会主題・副主題について

山梨県では、平成30年度から「確かな学び 広がる音楽」を研究テーマとして、目の前に児童生徒を中心に据え、音楽教育における課題やよりよい音楽の授業づくり等を目指して研究を進めてきた。音楽を知覚したり感受したりする学習を重点的に取り上げ、音楽を形づくっている要素がどのように関わっているのかを学習の中核に位置付けながら、音楽を表現したり味わったりする学習を展開する研究を推進してきた。授業実践においては、感性を高め、思考・判断し表現する「一連のプロセス」を重視し、音楽のよさがどのような要因から生まれてくるのかを探るために、思考し、表現したり鑑賞したりする学習を実現することで、児童生徒の感性が高まり、より深く音楽を表現し味わうことへとつなげるよう、学習を展開してきた。

これからの研究でも、「音楽を知覚したり感受したりしながら音楽に対する感性を働かせる学習」については重要な学習と捉え、児童生徒が感性を働かせ、他者と協働しながら音楽表現したり味わったりする活動において、「そのよさや価値等を考えるなどして、創造的に表現したり鑑賞したりする力を育成」することができるよう、研究を推進していく。この「よさや価値等を考える」ためには、音楽のよさ、面白さ、美しさを感じ取りながら想像力を働かせて聴き、どのように表現したいのか、音楽表現に対する思いや意図を明確にもち、自らの言葉で適切に表すことができるなどの力が求められる。これは、基礎・基本の習得とともに、音楽に関わる思考力、判断力、表現力等をどのようにして育成してい

くのかといった視点が重要であり、研究の中核になる。これまでの本県の研究実践の成果を基に、児童生徒が豊かで多様な音楽と出会い、音楽的な見方・考え方を働かせて学習することによって、「知識及び技能」の習得、「思考力、判断力、表現力等」の育成、「学びに向かう力、人間性等」の涵養が図られ、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力が育成され、生涯にわたって生きて働くものへとつながることを目指して、大会主題を設定した。

〈確かな学び〉

生活や社会の中で、児童生徒が様々な音や多様な音楽に出会う。出会った音や音楽をどのように受け止め、関わりを持つのか、音楽科は児童生徒相互の豊かに関わる力をつけることができる教科であろう。児童生徒が主体的に関わるためには、豊かで多様な音楽と出会う授業が求められ、「音楽的な見方・考え方」を働かせた学びに必要な手だてを講じていく。一人一人が学びたい、活動したい、思いや考えを共有したいという思いを生み、対話を大切にする毎日の授業が深い学びを育み、音楽に親しむための確かな学びへとつながる。

〈広がる音楽〉

音楽は、人と人とが関わる素晴らしさを伝えることができる教科である。児童生徒が表現したい思いや意図をもち、音や音楽を介してコミュニケーションしながら共有し、協働した音楽活動からは、豊かな情操が養われるであろう。そのような学びの中で、9年間に積み上げていく音と音楽、人との関わりを通しての学びから、生涯にわたって音楽に親しみ、音楽を愛好する心情が広がる。

〈知覚・感受〉

音楽によってもたらされるイメージや感情は多様である。様々な音楽を聴いて、面白さに気付く楽しさや、音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、楽曲のよさに気付く楽しさに出会いながら、音楽の学びが

深まっていく。

〈音楽的思考力、判断力、表現力等の育成〉

仲間との関わりの中で、聴き合い、伝え合いながら、音や音楽及び言葉によるコミュニケーションを図ることで、音楽的な能力が育まれていく。そして、自己のイメージや思いを大切に音楽表現を工夫し、音楽のよさや面白さを見いだしながら、音楽に関する自分なりの価値を生み出す。

II 研究内容について

1 研究推進の視点

①知識・技能を活用し、一人一人に主体的な学びを促す活動の工夫

授業では、児童生徒が「分かる」「気付く」ことができる学習を展開し、知覚と感受が行き来しながらそれらの関わりを考え、音楽のよさや楽しさを実感し、深める学習活動を展開する。習得した知識・技能を生かしながら主体的に自分の思いや意図を表現する姿が見られることを目指す。

②一人一人が明確な思いや意図をもち、伝え合う中で学びが広がる活動の工夫

音楽を表現したり聴いたりする活動を通して、感じたことや考えたことなどを音楽的な根拠や理由を示しながら仲間に伝え、音楽に対する思いや意図、生み出した価値を仲間と共有する学習活動を展開する。そして、仲間の思いや表現のよさを認め合う体験を積み重ねることで、自他の感じ方や考え方を広げ、自らの成長を実感し、音楽の学びが広がる。

③仲間と協働する喜びを感じながら音楽を表現したり味わったりする活動の工夫

仲間と音楽活動しながら考えたり発見したりすることで、学びが広がり、「音楽をより豊かに表現したい。」「より深く味わいたい。」という思いにつながる。そして自己の学びや変容を自覚し、これまで以上に音楽に対する喜びや活動の充実を図り、自分の生活や社会の中で音や音楽と豊かに関わるができる。

2 研究の重点

鑑賞（聴く活動）と表現活動とを一連の活動として捉えながら、聴く活動での児童生徒の気付きや思い等の言葉を紡ぐことが〔共通事項〕の学習の充実につながると考える。各学年において、歌唱・器楽・創作（音楽づくり）と鑑賞との関連性や、聴く活動を意識した授業づくりを行い、各学年の学びを積み重ねながら、思考力、判断力、表現力等の育成につなげていく。

重点1

学年の系統性を意識し、学びを積み重ねる授業づくり

重点2

〔共通事項〕を支えとし、各分野・領域間の学びの関連性を意識した授業づくり

重点3

聴く活動を通して知覚・感受する力を豊かに育み、表現及び鑑賞の学習を充実させる授業づくり

重点4

児童生徒の変容を見取るための工夫

III 研究の成果

重点1

○コロナ禍の中、限られた授業時数を加味しながら児童生徒の実態にあった既習曲及び楽器選択等配慮し計画的・系統的に指導を行ったことで、児童生徒が抵抗感なく学習に取り組むとともに、我が国の伝統音楽への新たな学びの積み重ねにつながった。

○授業のねらいに沿った常時活動を計画的に取り組むことで、活動の中で感性を働かせながら音楽的能力を育むことができた。そこで得た力を使って授業の中で思考判断する様子が見られた。

重点2

○要となる音楽を形づくっている要素を絞ることで、表現、鑑賞の関連づけができ

た。また授業において、子供たちの学びが焦点化され、そこから学びを広げたり深めたりすることにつながった。

○評価をAと判断する児童生徒の状況例、そして個別の働きかけを要する児童生徒への支援が明確にできた。

重点3

○聴く視点を与えて比較聴取することで、違いを捉えやすく、ねらいに迫る手だてとしてとても有効であった。

○相互に鑑賞する活動から、新たな気付きや、表現する自信をもつことができた。

○指導者が知覚と感受の関わりを意識した問い返しをすることで、児童生徒から知覚と感受の言葉を引き出し、聴き取ったことや感じ取ったことを意識しながら学習することができた。

重点4

○児童生徒自身が自分の演奏を客観的に振り返るICTの活用は、音楽活動の意欲を高めるとともに、何度も試行錯誤したり仲間と協働的に学習したりすることができ、大変有効であった。

○ICTの活用は、教師が児童生徒の気付きや感じたこと、またその変化などを次時の指導に生かすという変容の見取りという点でも、大変有効であった。

IV 今後の研究の方向性

知覚と感受を関わらせた学習は、意識的に継続させる工夫が必要である。また年間を通じて、思考のよりどころとなるような要素を焦点化して授業計画を立てることや、必要感をもって学ぶ授業展開の工夫を行っていく。今後、「個別最適な学び」や「協働的な学び」の充実を図るためにも、ICTの活用や、指導と評価の一体化の研究が求められる。